

神話的言説の図像表現と解釈

松村一男・研究会代表 永澤峻・世話人



はじめに

神話・イメージ研究会は、それまで象徴図像研究会およびシンボル文化研究会の名称のもとに長年にわたって美術史や文化史の視点からイコノロジー分析を行ってきた蓄積の上に、新たに神話学の視点も加えて二〇〇一年より発足した。

図像には言語とは異なる表現の文法があり、それを解読するための方法論として、ワールブルグ学派のイコノロジー（図像解釈学）が有効とされてきた。神話は言語表現であるが、通常の言語の使用とは目的も対象も意図も表現も異なっている。そうした独自の言語表現である神話を、図像におけるイコノロジーと同じ手法で分析できないだろうか、図像と神話を同じ地平において連動させて解釈してみたらどうだろうか、という思いから、我々はこの研究会を立ち上げた。今回、三年目でこの研究をまとめるにあたり、これまでの発表と討論の成果を本紙上に公開し、諸賢のご批判、ご教示を賜り、今後、さらに研究を進展させていくための指標としたいと願っている。

今回の論考は、基本的には研究会でのそれぞれの発表を活字化したものであるが、三年にわたる研究会であるため、その間に関心の変化によって、当初の発表とは異なる内容の論考となっているものも若干ある。しかし、対象が異なっても方法的な関心は変わらず持続しているので、研究が進展した結果として了解されたい。

上に述べたように、この研究会での関心は、神話学と美術史という二つの領域の関わるものであり、より具体的に我々二人の専門との関わりで言うならば、「神話的言説とその図像表現」および「西洋キリスト教世界におけるイコノロジー研究」とおおまかにまとめることができるものである。そこで、発表をお願いした方々の選択にもそうした専門領域への好みが見れていることは否定しがたい。その結果、論文の配置として、大きく二つに分かれることになった。もちろん読んでいただければ分かるように、それは相互に排除しあう性質ではなく、同じ問題意識のうち、言説面か図像面かのどちらにより力点が置かれているか、によって生じた違いである。

第一部（神話的言説の図像表現）に置いた四篇は、取り上げている問題は異なるが、いずれも神話的と呼んでも差し支えないような言説が対象となっており、それぞれが独自の方法論によって、当該の言説がどのような手段で表現されているか、そしてその意味や意図はどのように解釈できるのかを論じている。また第二部（美術的表現の解釈学）には西洋美術のイコノロジー的分析である五篇が置かれている。それぞれの部の内部ではテーマの歴史的な前後の順に配置してみた。

なお最後になるが、ご多忙にもかかわらずご発表くださり、また今回も、ご論考をお寄せくださった皆様には厚く御礼申し上げます。またこの研究会の趣旨にご理解をいただき、こうした形で研究成果を上梓することをお許しくださった総合文化研究所（わけでも編集面において貴重なご助言を賜った内田正夫所員）ならびに『東西南北』の編集委員の諸先生方にも厚く御礼申し上げます。次第です。